

赦すこと・赦されること(1)

みなさん、おはようございます。

今日のテーマは「赦すこと・赦されること」とさせていただきますが、大変重要で大きなテーマですから、何回かに分けてお話しさせていただきたいと思います。

はじめに

早速ですが、本日のテキストであるピレモンへの手紙をお読みしたいと思います。ピレモンへの手紙は 章しかない手紙で、聖書の中でも最も短い書のひとつですが、私たちにとって大変興味深いことを学ぶことができる書であると思います。 節の前半までをお読みしましょう。

キリスト・イエスの囚人であるパウロ、および兄弟テモテから、私たちの愛する同労者ピレモンへ。

また、姉妹アピヤ、私たちの戦友アルキボ、ならびにあなたの家にある教会へ。

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。

私は、祈りのうちにあなたのことを覚え、いつも私の神に感謝しています。

それは、主イエスに対してあなたが抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛とについて聞いているからです。

私たちの間でキリストのためになされているすべての良い行いをよく知ることによって、あなたの信仰の交わりが生きて働くものとなりますように。

私はあなたの愛から多くの喜びと慰めとを受けました。それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによって力づけられたからです。

私は、あなたのなすべきことを、キリストにあって少しもはばからず命じることができるのですが、こういうわけですから、

むしろ愛によって、あなたにお願いしたいと思います。

パウロは、当時の教会やクリスチャンを教え、励まし、戒めるためにたくさんの手紙を書きました。新約聖書の中には、パウロが書いた の書簡がありますが、伝承によればもっとたくさんの手紙を書いていたようです。そして、パウロの手紙は、主にローマにいるユダヤ人信者に向けて書かれたローマ人への手紙のように、回覧されて読まれた手紙もあれば、テモテやテスに向けて書かれた手紙で、主に当時の教会運営のために必要な手紙もあります。

このピレモンへの手紙ですが、書いたのはパウロで間違いのないと思います。そして、パウロだけではなく、彼のキリストにある兄弟テモテとの連名ということでしょうか。また宛先はピレモンです。パウロは、手紙を書く時の宛先の表記を、いつも慎重に、丁寧に言葉を選んで書いていたようです。パウロはピレモンのことを「同労者」と呼びました。同労者という言葉から連想する関係性は、同じ目的、目標を持ち、親しく、並行的な関係、すなわち上下ではなく、横並びかそれに近い関係といったところでしょうか。しかも、パウロは「愛する同労者」と呼びました。同労者としてだけではなく、友人として、あるいはキリストにある兄弟として「愛する」対象であったということですから、大変親しい関係であったと思います。

しかし、先ほどお読みした 節を見ますと、少し違ったトーンの実現が見られます。もう一度 節をお読みします。

私は、あなたのなすべきことを、キリストにあって少しもはばからず命じることができるのですが、

いかがでしょうか。この 節だけを切り取って読むと、大変高圧的な印象を受けます。少しもはばからず命じることができる。この表現から連想される関係は完全な主従関係です。

聖書を読むときに、私たちが注意すべきことのひとつが、歴史的な背景を同時に理解すべきである、ということだと思います。昨年も少しお話しさせていただいたと思いますが、現代ではいわゆる「奴隷」制度はないと言ってもよいと思います。おおよそ、独裁的な国家における異常な状況を除けば、奴隷制度も、事実上奴隷化されている状態もないと思います。しかし、新約聖書の時代では、奴隷は特別な存在ではなく一般的な存在でした。古代ローマ帝国における奴隷は、市民権を持つローマ人の少なくとも1/3程度の人数が奴隷であったようです。あるいはもっとたくさん、つまり、市民権を持つローマ人の3倍が奴隷であったという説もあるようです。町の中にはたくさん奴隷がおり、もちろん家に帰っても奴隷がいる、そのような時代です。このような時代における主人と奴隷との関係は、もちろん「完全な主従関係」です。民主主義や基本的人権が定着している現代では想像することも容易ではないと思いますが、奴隷は主人に絶対に従わなければならない。このような時代であることを前提として、今日のお話を聞いていただきたいと思います。

パウロがピレモンを「愛する同労者」と呼びつつも、一方では主人と奴隷の関係を想起させるような表現を使っているということから、ピレモンはパウロにとって、キリストにある、愛する同労者でありながらも、ピレモンはパウロが命じることを完全に行うべき存在でもあったことがわかります。

節を読みますと、この手紙が「姉妹アピヤ、私たちの戦友アルキポ、ならびにあなたの家にある教会」に対しても書き送られていることがわかります。このアピヤはピレモンの妻、アルキポはピレモンの子供ではないか、と言われているようです。そして、家にある教会ということですから、ピレモンは自宅を開放し、信者とともに神を礼拝していたのです。

節では、ピレモンとその家族、家の教会が、神にある祝福された、豊かな信仰を保っていたことがわかります。今日は時間の関係でこれらの点についてはお話しませんが、パウロが手紙を書く時には、その宛先の人たちには多かれ少なかれ問題があって、それを戒めるために書かれたことが多かったことを考えると、ピレモンとその周辺は、信仰的には大変良い状態であったことがわかります。

整理しますと、

- ・パウロにとって、ピレモンは愛する同労者であった。
 - ・パウロはピレモンにどんなことでも命ずることができるような関係でもあった。
 - ・ピレモンの家族は、信仰的に恵まれた、豊かな環境であった。
- ということになります。

さて、前置きはここまでにして話を前に進めたいと思いますが、ピレモンへの手紙は 章しかない手紙であり、節の区切りでは 節しかありません。このような短い手紙の内、その1/3がピレモンに対するあいさつ、前置きとして書かれています。これにはパウロの深い配慮、洞察があつてのことかと思えます。では何に対する配慮、洞察があつたのか。少しお話を進めたいと思います。 節の後半から 節までお読みします。

こういうわけですから、

むしろ愛によって、あなたにお願いしたいと思えます。年老いて、今はまたキリスト・イエスの囚人となっている私パウロが、

獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。

彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても、役に立つ者となっています。

そのオネシモを、あなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。

ピレモンへの手紙は、そのタイトルの通りピレモンに宛てて書かれた手紙ですが、その内容はオネシモに関するについて書かれています。パウロは「獄中でイエス・キリストを自分自身の救い主として信じ、救われたオネシモについて、オネシモに送り返す」と書きました。オネシモが過去にピレモンとの間に何の関係もなかったの

あれば、パウロは単に一人の信者をピレモンに託すということだけですが、このオネシモはピレモンにとっては大変問題のある人物です。というのも、オネシモはピレモンの奴隷であった人物で、ピレモンの元から逃げたからです。

当時の社会は、奴隷に対して大変酷い扱いをしていました。ペテロの手紙第 2 章で、ペテロはこのように教えています。

しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい。

人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。

善良で優しい主人だけではなく、横暴な主人がいたということですね。しかもそのような主人からは、不当な苦しみを受けることがあったということです。奴隷制度がない現代では読み飛ばしてしまうかもしれませんが、もし今日集まっていた方々の中に、奴隷という立場の方がいるとしたら、簡単には言えないことではないかと思えます。

東京基督教大学名誉教授の湊晶子さんの論文によると、紀元前 1 世紀の後半期からローマの奴隷制はその頂点に達し、人口の約 1/3 が奴隷で占められていたこと、また当時奴隷がイタリアから逃亡することはほとんどできず、もしその目的を達したとしても、盗賊や追はぎの犠牲となり、もし逃亡が失敗した場合は、決闘場や十字架上の露と消えるか、あるいは一層残虐の私刑を受けなければならなかったようです。逃げることはできないし、逃げたとしてもまともに逃げ切れることもなく、逃げようとして失敗すると残虐な刑が待っている。このような状況下で、オネシモはピレモンの元から逃げました。そして、恐らく捕まり、投獄されました。本来であれば、残虐な刑を受けることになったのでしょうか、その投獄された牢の中でパウロと出会ったのです。

逃亡が失敗した場合に、どうして決闘させられるか、十字架で殺される、あるいは残虐な私刑を受けなければならないのか。少なくとも一つの大きな理由は、恐怖による奴隷の統治ということだと思います。奴隷であるということは、人間にとって決して心地よいことではありません。主人の性格や考え方によっては、生きながらにして地獄を見るような生活を強いられることもあったと思います。しかも、それに対して一切抵抗することができずに、どんなことでも受け入れなければならない。このような状況を考えるだけでも、奴隷が、隙があれば逃げ出したいと思うことは容易に想像できます。そのような奴隷に対する精神的な足かせとして、失敗したらどうなるかを見せつけることは、奴隷制度を維持する上で必要なことであったと思います。

このような当時の奴隷制度に対して、パウロはピレモンに対して「オネシモを受け入れよ」とお願いしています。しかも、パウロはピレモンが拒否することがないように「私は、あなたのなすべきことを、キリストにあって少しもはばからず命じることができる」と、先に釘をさしています。

パウロは酷いことをするな、と思われるかもしれませんが、しかし、パウロの心中をよく考えるなら、私はこの手紙がピレモンに対して書かれた私信ではなく、パウロの後の時代に生きるすべての信者に対して、あるいはすべての人に対して、赦すことの重要性を教える大変重要な手紙であることを学ばされます。その理由について、いくつかのポイントから考えてみたいと思います。

赦すことには覚悟が必要

まず、赦すことには覚悟が必要である、ということです。

ピレモンにとって、オネシモが逃げたことそのものを赦すことは、ピレモンの心の中の問題ですから、頭にくるよう

なことがあったとしても、時間とともに解決できたかもしれません。オネシモがピレモンの元から逃げ出してどれくらい時間が経ったのかわかりませんが、時間がこのような感情的な問題を解決することもあります。しかし、ピレモンにとってもっと悩ましい、頭の痛いことは、先ほど説明しましたように、当時の奴隷社会では逃げた奴隷に対して何かしらの大きな罰を与えることが常態化していたということです。それは、奴隷社会を維持するために必要な対策であったのです。もし、ピレモンがオネシモを、何の罰も、あるいは大きな罰を与えることなく受け入れてしまえば、ピレモンの元にいる他の奴隷だけでなく、その地域の、あるいはその社会に存在する奴隷はどのように理解するでしょうか。ピレモンの奴隷なら、逃げても殺されない、逃げても酷い罰を受けることはない。おそらくこのように理解するでしょう。それは、ピレモンにとって、自分自身の奴隷、また社会全体の奴隷が統治できなくなるかもしれないという大きな問題を意味するのです。そればかりか、ピレモン自身が社会的に制裁を受けなければならない、つまり奴隷制度を否定するような行動を取ることで、他の奴隷を持つ主人たちや、場合によっては政府から何かしらの制裁を受ける可能性もあったと思います。

パウロは、オネシモを受け入れ、赦すようお願いしました。それは、感情の問題だけでなく、このような当時の奴隷統治に対する大きな挑戦をも意味しています。気持ちとしては赦してやりたいが、状況はそれを許さないことをパウロは知っていました。ですから、パウロはピレモンに対して、感情的に赦すことだけを勧めたのではなく、赦すことによって引き起こされる問題さえも、覚悟をもって受け入れることを勧めた、ということかと思います。

私たちにとっても、何かを赦す、受け入れる、ということは感情的な問題として決して小さいことではないと思いますが、もっと厄介なのは赦しによる環境の変化かもしれません。ルカの福音書 章でイエスが教えている放蕩息子のたとえ話も、赦しによる環境の変化について父親は覚悟していたことを読み取ることができます。事実、この父親は弟が出て行ったときから既に弟のことを赦していましたので、帰ってきた弟に対して、あらかじめ用意していた指輪や靴を履かせました。しかし、帰ってくるかどうかわからない弟のものを用意することで、家族や雇人から何を言われるかわからない上に、帰ってきた後、息子のための宴席を設けることで、兄からも酷いことを言われることとなります。場合によっては父と兄との関係が悪くなるかもしれない。それでも、父は弟を受け入れ、赦しました。父は初めからこのような環境の変化さえも覚悟していたはずで

赦すことは神の命令

そして、赦すことは神の命令である、ということです。

ルカの福音書 をお読みします。

気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

イエスは、弟子たちに対して悔い改めるなら赦せ、と命じておられます。

パウロは、オネシモが犯した罪について戒めた上で、彼自身が自分自身の罪を悔い改めた結果、神との和解、赦しを得て、パウロにとって「役に立つもの」となったことを教えていますが、ピレモンにとってオネシモはまさに自分自身に対して大きな罪を犯した奴隷です。パウロは、ピレモンに対しては何一つはばかることなく命じることができるが、パウロはピレモンに対してオネシモを赦せ、とは命じていません。それは自発的でなければならない、と教えています。赦すかどうかはピレモンが決める、ということです。

パウロが言ってきたから渋々赦すのではなく、自発的に赦すことをパウロが期待するなら、その根拠は何か。自発的である根拠は何なのか。もし、根拠なく赦すのであれば、やはりパウロの命令ということになってしまうと思います。

ピレモンだけでなく、私たちは、何を根拠に、何を理由に自分との直接的な関係がある人を赦すことができるでしょうか。あなたに対して罪を犯した、あるいは何か赦しがたい不誠実なことをした人を赦すために、何が必要だと考えられるでしょうか。

私たちが誰かを赦すときの根拠の一つは「相手がもう、二度と同じことを繰り返さない」、ということかもしれません。同じことを繰り返さないなら赦す。人間ですから失敗することもあると思いますので、絶対にしない、繰り返さないということは断言できないと思いますが、それでもこのように約束するなら、私たちは相手を赦すことができるかもしれません。しかし、イエスは「あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」と命じられました。二度と繰り返さないどころか、日に七度罪を犯しても赦せ、という命令です。

一日に七度とはどういうことでしょうか。それはもう、何度でも赦せ、回数に制限を付けずに赦せ、ということだと思います。何度同じことを繰り返そうが、あるいは社会的にどれほど大きな罪であろうが、赦せ、ということです。赦される側にとっては大変都合の良い話かもしれませんが、赦す側にとっては大きなチャレンジになりますね。その根拠は何か。言うまでもないかもしれませんが、神の赦しはまさにこのような無制限の赦しであるからです。神の赦しは私たちに何を与えたのか。神にある永遠のいのちと神の愛です。私たちがそのいのちと愛を体感していても、そうでなくても、神の赦しは私たちにいのちと愛を与えています、しかもそれを与え続けていらっしゃるのです。私たちが、条件を付けずに人を赦すことができるなら、そのいのちと愛を体感することができます。神はなぜ無条件に赦すことを命じられたのか。神が無条件に私たちを赦されたからです。そして私たちが無条件に赦すときにこそ、神のいのちと愛を、私たちが自分のこととして体感することができるからです。

パウロは、この神のいのちと愛を誰よりも体感している人でした。テモテへの手紙第一 で、パウロはこのように告白しています。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。

しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。

どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。

パウロは、オネシモにとってピレモンを赦し受け入れることは、何よりもこの神のいのちと愛を体感するための最高の機会となることを知っていたと思います。だからこそ、オネシモを自分の元に置いておくのではなく、ピレモンのためにもオネシモを送り返したいと思ったと思います。問題を起こさないことだけを考えるなら、オネシモを送り返さない方がいいのです。それでも、オネシモを送り返すのは、何よりもこの機会を通して、ピレモンが神のいのちと赦しを体感することができるからです。そして、何よりも赦すことは神の命令であるからです。その命令は、主人が奴隷にするような命令ではなく、神の無限のいのちと愛を体感させるための命令です。

赦すことは永久に取り戻すこと

最後に、ピレモンへの手紙 節をお読みしたいと思います。

彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょう。

赦すことは永久にオネシモを取り戻すことになる、とパウロは教えました。客観的に考えれば、オネシモは逃亡した奴隷であり、本当に奴隷として役に立つかどうかは帰ってこなければわからない、しかも先ほどお話ししたよう

に、オネシモが受けるデメリットは計り知れない。そんなオネシモを永久に取り戻すことになって、ピレモンにとって何か良いことはありますか？

しかし、この事実を通して、神が何の価値もない私たちを永久に取り戻して下さったことを覚えたいと思います。価値があるから取り戻して下さったのではないです。ピレモンにとってオネシモを取り戻す以上に、私たちを取り戻す価値はないです。しかし、神は当たり前かのように、当然かのように私たちを迎えてくださいました。なぜでしょうか。説明はできません。唯一の根拠は、神の愛です。愛はこの全く理解できないような、不釣り合いな救いを実現してくださいました。私たちも、神を信じるなら、その救いを受けるなら、永久に取り戻されるのです。

もし、まだこの神の救いを受けていない方がいらっしゃるなら、今日、その救いをお受けください。神はあなたを永久に取り戻すために、全部赦す、と宣言されました。悔い改めるなら全部赦されます。神の約束です。

お祈りしましょう。